

製品開発におけるフロント・エンド・ローディング

— 製品開発における欧米の違い —

(株)ジョンクェルコンサルティング 落合 以臣

A Front End Loading in Product Development

“The difference between the United States and Europe in product development”

Shigemi Ochiai, Jonquil Consulting Inc.

**Keywords:**機能・タガ・ステップ・アクションリサーチ・共同作業・可視化・定量化

今年、製品開発のフロント・エンド・ローディングの真髓をかなり深掘してきました。特に、開発当初に機能の詳細な可視化・定量化を行うことは、当然なことではありますが、それをどのような方法で成し遂げるのかが重要になります。また、機能を明確にするためには、その先にあります製品テーマを創出することからはじめることが必要です。製品テーマ創出と言っても、唱えることは簡単ですが、どのような方法で創出するのが決め手となります。

こうしたことを踏まえて、今年一年、スケジュールが押し詰まった段階で露呈するリスクについて、その定量的な内容を浮き彫りにし、それらの対応策を具体的に提示してきました。しかしながら、製品開発のフロント・エンド・ローディングは、Smith、Cooper、Rosenthal 先生らによって1980年代に提唱され現在に至っておりますが、その理解については欧米の間でも大きな違いがあります。確かに、フロント・エンド・ローディングの概念は、開発当初にゴールまでの道筋を可視化・定量化することで、筆者もこの考えを踏襲していることは事実です。ただ、開発当初に可視化・定量化するうえで、そのプロセス上に考え方の違いが起こります。米国流の考え方は、ひとつひとつのステップを消化していく、つまり、ステップごとにタガをはめ、そのタガをクリアしなければ次へ進めないという方法です。欧州流では、ひとつひとつのステップを可視化・定量化によって消化していく考えは同じですが、ひとつの流れの中で消化していく、つまり、アクションリサーチの方法です。アクションリサーチは、ドイツ人 Kurt Lewin(1890-1947)先生によって提案され、我々が直面する問題の解決に向けて、研究者と当事者の人々々が共同で取り組む実践のことです。この2つの違いは、開発コンセプトを可視化・定量化することの重要性を唱えていることは同じですが、そこに辿りつくための方法に大きな違いがあるわけです。筆者は、アクションリサーチの真髓である「我々が直面する問題の解決に向けて、研究者と当事者の人々々が共同で取り組む実践」を開発当事者とコンサルタントに置き換えて、製品開発の過程を可視化・定量化する新たな方法として RCOM(Risk Control Method)を提唱してきました。今後も、さらに製品開発のフロント・エンド・ローディングに、アクションリサーチを掘り下げていきたいと思えます。

2013年も年の瀬を迎え、あわただしい日々をお過ごしのことと思います。今年、皆様にとりましていかがでしたでしょうか。お忙しい中、今年一年の愛読をしていただき、誠にありがとうございました。御礼申し上げます。2014年も皆様にとりまして、輝かしい年になりますようにお祈りしたいと思います。そして、2014年もこの *JQ International Review* が、愛読される方の背中を押すことができれば幸いです。